建築組パックス有限会社

古民家リフォーム

上野 様邸

ユーザー訪問

DATA
八戸市鮫町
2016年5月竣工
■延べ床面積／35.00坪（115.93㎡）
■使用青森県産材／スギ（柱、天井、腰壁、2階床、建具）、カラマツ（リビング腰壁）、ナラ（リビング床）、ケヤキ（梁）。

上野（うわの）様邸が竣工した5月下旬（2016年）、リビングに薪ストーブが運び込まれた。ずしりと重いベルギー製のドブレー760CBJ（鋳物）。庭のフジの花が見える窓辺に〝主役〟の薪ストーブが鎮座すると、木に囲まれたリビングの空間がきりりと引き締まった。床はナラ、腰壁はスギとカラマツ、天井はスギで曲がりの梁はケヤキ――と青森県産材の木肌が美しい仕上がりは、リフォームしたのだとは思えぬ、まるで新築である。リビングだけでなく、1階2階の室内全部、外壁も新しく張り替え、断熱・耐震性も向上させた家まるごとのリフォーム。定年退職を控え、第二の人生を心豊かに暮らせる〝終の棲家〟にしたい――との上野様の要望に、建築組パックス㈲の大西昇社長は自社の〝売り〟の『古民家リフォーム』で応えた。

〝終の棲家〟は古民家で大壁を真壁にリフォーム

『宮大工の手刻みによる家づくり――がパックスのこだわり。そこを外せば当社の家ではない。カンナをかけ、ノミで刻んでこそ本物の木の良さが引き出せる。木目が詰まった（細かな）無垢材の美しい木肌、野趣ある曲がりの梁など、樹種それぞれの特性を生かして組み合わせた昔の木の家――そのシンボルが古民家だ』――大西社長が地元紙に書いた記事広告である。さらに続き、『昔ながらの大工の技は、新築だけでなく古い家を直す際にもいかんなく発揮できる。既存住宅の構造材はそのままに、床の冷たい化粧合板フロアは温かい無垢のスギへ、壁のクロスは漆喰や珪藻土仕上げへ、新築同然にきれいに仕上がる』――この文章が、上野様の目に留まった。

ご主人の話　デーリー東北の「情報ページ」に載っていたんです。見出しの「古民家リフォーム」に目が留まりまし

新しく張り替えられた板壁が古民家の佇まいを感じさせる

無垢の木や漆喰の本物を使って新築のように生まれ変わったリビング。曲がりを生かしたケヤキの梁が空間に木の味わいを与えている

た。読んでみると――『団塊世代も定年を迎え、現役で働いている頃には関心を持たなかった「我が家」と向き合う時間が増えました。そうなると、ああしたい、こうしたい、と目に付く箇所が出てくるのではないでしょうか……』――。読んだのは去年（２０１５年）です。定年まであと１年で、築32年になる自宅を建て替えるか、リフォームするか思案していたときでした。

大西社長の話　定年後からの夫婦２人の時間を有意義に過ごそうと、多くの人は住まいに〝生き甲斐〟を求めるようになります。とはいえ建て替えとなると解体費もかかるし、基礎も新たに打たなければならないから金額が大きく違ってきます。それで、基礎や土台を調査して問題がなければリフォームを薦めることにしています。単に新しくするのではなく、無垢の木や漆喰などの〝本物〟を使って仕上げるのです。年輩者には自然素材に囲まれた古民家風の家が最も馴

家まるごとのリフォームで洋室も新築のように新しくなった

染むはずですからね。

昔の木の家に落ち着き クロスの壁から漆喰に

ご主人の話　1階の8畳と6畳の続き間をワンルームのリビングにして、薪ストーブを付けるのが要望でした。キッチンは対面式。風呂はタイル貼りで寒いから今風のユニットバスに。寝室も、2階の部屋も、外壁も新しくしたい。建て替えと金額的にどれくらい違うのか――など聞いてみたいことが一杯ありましたが、誰に聞けばいいのか。記事を読んだのはそんなときでした。記事の内容がいつまでも頭に残っていて、書いた人に直接相談したくなったのですが、さて何ていう会社だったか。確かカタカナだった。ネットであれこれ検索して「パックス」に辿り着くまでに半年かかりましたよ。

食器棚にも無垢のスギが使われている

奥様の話　新井田川の近くでパックスの完成見学会があると知って、家族で行ってみました。玄関に入ったら、圧倒されました。床も壁も天井もみんな「木」でした。他社で新築した知り合いの家も見せて頂いていましたけど、室内は全部クロスでしたね。見学会の家には主人の憧れの薪ストーブが付いていて、しばらく火のそばから離れませんでしたよ。

ご主人の話　一部屋だけとか、風呂場を直すだけとか、ちょっとしたリフォームなら近くの工務店や大工さんに頼んでもいいんですけど、こっちが考えているのは家全体ですからね。まるごとのリフォー

ム。そうなると安心して任せられる人に頼まないとね。一級建築士の大西さんなら安心感がありました。

大西社長の話　私もそうですが、還暦を迎えた世代にとっては、自分が育った頃の昔風の家に落ち着きを感じるものです。何が落ち着くかというと「木」なんですね。無垢の木。昔はクロスなんて無く、みんな木でした。幼い頃の記憶に「木」が染み込んでいるんですよ。無垢の木の良さを生かすのが〝手刻み〟です。機械によるプレカットではなく、大工による手刻み。「木」にも「家」にも魂がこもるのです。上野様邸は柱の見えない大壁造りでしたけど、元の柱はそのままにして、真壁風に新たに柱を見せ、クロスの壁は漆喰を使って〝本物〟の仕上げにしました。もちろん以前より暖かくならなければ意味がありませんから床、壁、天井に断熱材を充填しました。

ご主人の話　薪ストーブが夢だったんですよ。火を見ていたくてね。大西さんがご自身の所有の山から薪にする木を運び出してもいいと言うので、工事が始まる前に軽トラを買いました。薪割機も。〝終の棲家〟を薪ストーブが暖めてくれるでしょう。

大工による手刻みで無垢の木の良さが生かされている

庭に積み上げられたストーブ用の薪

ご主人の夢だったという薪ストーブ（試運転模様）

PACS
Perfect Architecture Consulting System
建築組パックス有限会社
八戸市大字新井田字石動木平1-1
TEL.0178-25-6020　FAX.0178-25-5542
http://kenchikugumi.jp
E-mail:pacs@kenchikugumi.jp

建築組パックス有限会社

古民家を建てる

川村 様邸

現場訪問

DATA
三戸郡五戸町
2017年5月竣工予定
■延べ床面積／52.73坪（174.03㎡）
■総施工面積／68.30坪（225.13㎡）
■使用青森県産材／クリ（土台、大黒柱）、スギ（柱、梁）、ケヤキ（大梁）、クルミ（柱）など。

昔の家を建てたい――。それが川村様の要望だった。山から伐り出した木を自然乾燥させておき、現場に使う木材を拾い出して大工が鉋がけをし、墨付けし、手刻みして建てる〝昔の家〟。集成材は使わず、無垢材で、プレカットではなく大工が鑿（のみ）で刻む昔ながらの家づくり――そのことに川村様は頑なにこだわった。現代の家づくりは機械によるプレカットが主流で、組み立てるだけだから手刻みのできる大工が少なくなってしまった。割れたり捩（ねじ）れたりしないように木をスライスして貼り合わせた集成材。外壁に1枚1枚板を張る手間を省いて速く仕上げるために売り出されたサイディング。石膏ボードに貼るビニールクロスもそう。無垢材の木肌の美しさと、刻む大工の技や手間を捨ててきたのが現代の家づくりともいえる。その真逆にある、昔の家の極め付きが「古民家」だ。倉庫に備蓄してある種々の木材、長尺物にプレーナー（機械カンナ）がけできる広い加工場、それに手刻みができる宮大工――この三条件がそろっているからこそ、建築組パックス㈲は「古民家」を受注できる。

施主の要望は〝昔の家〟宮大工が建てる古民家

柱を壁の内側に隠す大壁の家づくりが増え出した頃から、〝木の良さ〟がおろそかにされ出した。それは高度経済成長で住宅建築ブームが起きた時期と重なる。造れば売れた時代。数多く売るため、手間暇を省いて現場の回転率を上げようと、それまで柱を見せていた真壁の和室も大壁にしてクロスを貼るようになった。隠れて見えないから、安い外材がもてはやれた。手刻みがプレカットに替わり、大工が現場で鑿を研ぐ姿もとうに消えた。工場生産の集成柱が主流となってからは、木目の美し

2016年11月下旬に上棟し、2017年5月の竣工に向けて現場は進んでいる

梁に使うスギの長尺物を機械カンナのプレーナーにかける。一般に他社では現場に使う木材は木材店に発注して取り寄せるが、パックスは自社の加工場で加工する

さだけでなく、木の〝上下〟を見る職人の目も必要なくなった。

無垢材に手鉋（かんな）をかけて美しさを引き出し、大工が1本1本、手刻みした柱を室内に見せて建てるのが真壁の家――まさに川村様邸がそうだ。隠れるのは床下の木材ぐらい。大西社長はこれまで培ってきた「古民家」のノウハウを、半年間かけて川村様邸に注ぎ込むのである。

高台にある建築組パックスの加工場。近づくにつれプレーナーの機械音が高くなった。加工場の入り口も、脇も、奥も積み上げられた木材で埋まっていた。川村様邸に使う木材である。2016年10月に着工、11月に上棟し、来年5月の完成を目指す。場内では木材の修正挽きをしている最中だった。粗挽きし、それを現場で使う寸法に合わせてプレーナーで挽くのが修正挽き。大西社長が見守る中、ご長男で宮大工の大西洋平棟梁がフォークリフトを操作していた。持ち上げた長いスギの梁を、何度もハンドルを回しながらプレーナーに近づけ、載せる。

この梁は、川村様邸のメインとなる18帖の吹き抜けのリビングに架かる。背（高さ）が尺5寸（45㎝）、幅が5寸（15㎝）、長さが3間（5・46m）で、それが3本。3間四方で2階の天井まで吹き抜く開放空間を引き締めるポイントとして41㎝角の大黒柱が立つ。10年間

アカマツの曲がりの加工をする大西洋平さん。宮大工の技で木の味を引き出す

プレーナーにかける木材をフォークリフトで運ぶ作業を見守る大西社長（左）

乾燥させた100年もののクリの出番だ。大黒柱に架かる大梁はケヤキで長さが6m。勾配天井を斜めに支える垂木も一般住宅の柱と同じ3寸5分（10㎝）角が80本も並んで吹き抜けから見えるようになるのだから、さぞかし壮観だろう。

住む人を喜ばせる〝力〟大工が木に魂を込める

――川村様との出会いは。

大西社長の話　当社の展示場を見学にきたのです。知り合いの建具屋が川村様に、「古民家を建てている設計屋がいる」と私のことを紹介してくれたらしく、まずは展示場を拝見しようと来られたのが2年前です。そのときの川村様の反応は、ふーん、でした。気に入らなかったんです。展示場はそれなりに凝った造りにしたつもりでしたけど、その程度では物足りなかったのでしょう。

川村様はお仕事柄、大手建設会社とのお付き合いもあって県外に出かけることが多く、何年も前からあちこちで古民家を見学して歩いていた

いつでも現場に使えるように常に木材をストックして乾燥させておく

そうです。つまりは〝目が肥えていた〟ということですね。ですから、田舎によくあるような、瓦屋根の端が反り返った、外観だけは〝豪邸〟を誇示した家でも、中に入ってみたら予算を削るためにアパートみたいな粗末なキッチンやビニールクロスの室内だったりして、さんざんがっかりしていたようです。〝本物〟を求めていたのです。

――古民家で建てた医者の家を見せたら大いに気に入ったそうですが。

大西社長の話　10年ほど前に、ある病院の先生のお宅を古民家で建てました。使った木にしても、造作にしても凝りに凝った家でした。造り手としては満足感がありましたが、でも、そういう家って、お施主様が本当に満足してくれるまでには時間がかかるものなんですよ。どういうことかと言うと、家を見た友人や知人が室内を見回してしみじみと感じ入ったふうに「すごいな」と呟くのを何度も何度も耳にしているうちに、じわじわと染みるように、やはり本当にすごい家なんだ、とご自身も思い到るようになるからです。

その医者からも、「本当にいい家を建ててくれた」って感謝されたのは建てて5、6年経ってからでした。大学時代の先輩が泊まったときに「ものすごい家だな」と言われたのもそうですが、とにかく来る人来る人が口をそろえて「すごいな」と。先生の了解を得て見学にお連れした川村様もそうでした。探し求めていた本物にやっと出会えたという表情をされていました。

古民家には、住む人を心底喜ばせる力があるのです。その力は、大工が木に込めた魂でしょう。一般住宅では考えられないほど手間暇のかかる家づくりではあるけど、また建てたくなる魅力があるのです。

10年間乾燥させた100年もののクリが大黒柱になる

柱として立つ4寸角のスギ。目が細かなスギの木肌が美しい

PACS
Perfect Architecture Consulting System
建築組パックス有限会社
八戸市大字新井田字石動木平1-1
TEL.0178-25-6020 FAX.0178-25-5542
http://kenchikugumi.jp
E-mail:pacs@kenchikugumi.jp

企業組合 県木住

ルポ

第45回もくもくきるきる チェンソー体験会 長尾明棟梁の大黒柱伐採

床板に無垢のスギが使われるようになった――ことが、ここ20年ほどの間に家づくりで大きく変わったところだ。それ以前は、床には合板フロアが当たり前だった。表面を堅く加工してあるからキズは付きにくい反面、冬場は金属のように冷たい。対照的に、足裏から柔らかな温もりが伝わってくる無垢のスギ。長く暮らしていくうえでどっちが健康にいいか――。じわじわと染み込むように自然の木の良さが受け入れられてきた結果である。〝近くの山の木〟を使った地産地消の家づくりを展開する企業組合県木住。ひと役買っているのが、施主参加による『もくもくきるきるチェンソー体験会』(注)だ。大黒柱にするスギを施主自らチェンソーで伐り倒す体験企画で、45回(62組)目。今回は、体験会初となる「大工」の長尾明様(長尾工務店、棟梁)が挑んだ。

25mの還暦スギを倒す 固唾飲んで見守る家族

伐採現場は蟹田の国有林。スギ林の薄暗い林道に一昨日の雨の水溜りが残っていた。4台の車が水を弾きながら奥へ向かう。駐車スペースに車を誘導してくれたのは、チェンソーマンの秋田貢氏(県森林組合連合会事業部長)。10年前に大鰐の山林で実施した体験会第1回目からの講師だ。

丸太の輪切りに挑戦する長尾棟梁

車から降り、秋田講師と向かい合う。安全の第一歩は挨拶から。県木住の佐藤時彦代表が参加者を紹介する。長尾明様、奥様、お嬢ちゃん、ご両親。それに大工仲間の澤田尚生棟梁。木を使い慣れている大工とはいえ、チェンソーで伐るのは初めてだけに2人とも緊張の面持ちだ。

秋田講師がチェンソーを持ち、まずはスタート、ストップの練習。スターターロープを引き上げ、エンジンをかける。かかったら、レバーを引き、ブレーキを外す。2度、3度強く吹かす。ストップさせるとき

お嬢ちゃんもヘルメットをかぶって“運動”にひと役買う

は、その逆で、レバーに手首を押し付けるようにしてブレーキをかけ、エンジンを止める。何回かくり返す。

次は、実際に伐ってみる。横にした丸太の輪切りから。秋田講師が手本を示す。滑らかな手つきは熟練者のものだ。なかなかそうはいかないものの、さすが職人だけあって覚えが速い、と秋田講師。

輪切りの次は、突っ込み。チェンソーのバー（刃の部分）を丸太に突き刺すのだ。秋田講師が丸太にバーを水平にあて、その角度を、水平のまま開いていって、先端を貫通させた。続いて長尾棟梁、澤田棟梁が挑戦。輪切りはバーを直角、突っ込みは水平にする――という基本を学んだ。

伐採現場はそこからさらに奥だ。街なかから離れた人目の届かない山奥が林業の仕事場である。そそり立つ樹高約25m、樹齢60年の還暦スギは、高さも太さも過去最大級だ。これを2本倒し、2017年5月から建てる長尾様邸の大黒柱や柱にする。山の神にお神酒と塩を供え、全員で安全祈願。秋田講師がスターターロープを引き上げた。一発でエンジンがかかった。

建てる〝過程〟を施主と共有するのが県木住の家づくり。その一つが、山から木を伐り出す過程に施主が参加するチェンソー体験会だ。スギの大木が倒れ込んでドーンと跳ねる迫力に思わず家族から上がる「すごーい！」の歓声。これまで参加した家族の数だけ感動を重ねてきた。

山の神にお神酒と塩を供え、全員で安全祈願

回転するバーが丸太に食い込み、オガ屑が噴き出る。試し切りの次はいよいよ本番だ

倒す側の幹に付ける三角形の切り口が『受け口』。その反対側、受け口の水平のラインよりやや上に付ける水平の切り口が『追い口』。段差の部分が『つる』となって、傾き出した木を根元で引っ張りながら倒れる速さと方向を調節してくれるのである。

秋田講師が模範を示す。その手順を目に焼き付け、いよいよ長尾棟梁の番だ。猛烈に回転するバーが幹に食い込む。噴き出るオガ屑。奥様もお嬢ちゃんもご両親も固唾を飲んで見守っている。受け口の次は、背後に回って追い口。チェンソーを置き長尾棟梁が、追い口に打ったクサビを叩き込むにつれ、樹高25ｍの大木が傾き出した。退避！　傾きが増し、狙いどおりの地点に真上から覆いかぶさるように倒れ込んでいって、ドーンと跳ねた。寄り添って立つ奥様とお嬢ちゃんが、「すごーい！」。また一つ感動が生まれた。

秋田講師（左）の指導に従いバーを水平にする

〝山への感謝〟の気持ち 結びつく〝家を大事に〟

佐藤代表のコメント　私は、建築材を作るための「人工林林業」のことを知ってもらいたいと、常々思っています。そしてその人工林林業の主役はスギであり、この青森県にスギがたくさんあるということも知ってほしいと考えています。『家は木造がよい、木は地元のものがよい、家を建てるのなら、ぜひ地元の木で』と提唱している我々のもう一歩踏み込んだ提案がこの〝もくもくき

るきるチェンソー体験会”の大黒柱伐採です。家を建てる方を山に連れて行こう！　チェンソーを握ってもらおう！　大黒柱を伐ってもらおう！　そして山への感謝の気持ちを持ってもらおう！　家を大事にしてもらおう！　ということまで結びついて欲しいと思います。

50年60年育ったスギの木を自ら伐ることには大きな意味があります。たった1本のスギですが、そのスギが長い時間育ったその場所に出向いたということ。そして自分で伐ったということ。倒れる瞬間を見たこと。全て現場でないと体験できないことです。いい家づくりにしたいという施主の皆さんの前向きな気持ちがこの体験につながります。

”私はお客さん（家づくりを頼む人）で家づくりはプロに全てお任せ”というのが普通の感覚ですが、『施主・設計者・職人、皆でいい家を作っていこう』という気持ちになってもらえたら必ずいい家づくりになると私は考えています。

山ですっくと立っている樹木（スギ）が伐られると丸太になり、製材所に運ばれて木材に変わります。もともと生き物であった樹が建築材に変わっていく最初の場面を見て施主の皆さんは何を感じるでしょう。じーんと感動し、目を潤ませる方もいらっしゃいます。林業や森林のことを知れば知るほど、木の家の暮らしに豊かさを感じるのだと思います。

たくさんの方に、木の家で楽しい暮らしをして欲しいと願います。今まで60家族以上の方がこの大黒柱伐採に取り組まれました。全面協力してくださっている青森県森林組合連合会の皆さんのおかげです。ありがとうございます。引き続きお願い致します。

パパが木を伐る姿を、近くからママ、お嬢ちゃん、ご両親が見守っている

（注）もくもくきるきる…黙々と木を伐り倒し丸太を切る、の意味

近くの山の木で家をつくる 企業組合

県木住

企業組合 県木住

青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333 FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com E-mail : info@kenmokujyu.com

企業組合 県木住

第９回あおもり産木造住宅コンテスト優秀賞受賞

K 様邸

ユーザー訪問

DATA
青森市佃
2015年4月竣工
■延べ床面積／35.87坪（118.81㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（柱、大黒柱、床、一部外壁、ウッドデッキ、格子、塀）、アカマツ（梁）。

青森市佃××。グーグルマップのストリートビューに住所を打ち込む。画面に、板張りの家が現われた。2階のバルコニーの格子も木で、吹付仕上げの壁との色合いが柔らかに調和している。周囲に並び建つ、今風のモダンな箱型の無落雪住宅とは対照的な、軒の出た切妻屋根がいかにも〝家らしい家〟の外観。カーナビの案内でK様邸に着くと、ストリートビューの画面にはなかった、塀が回されていた。これもスギの板塀で、その内側には芝生が広がる庭。塀に囲われると、家は額に入れた絵のように引き立つ。玄関へ向かおうとしたら、先に板張り風の和風のドアが開いて、ご主人が笑顔で出迎えてくれた。

切妻と板壁の和風外観
家を囲む塀もスギの板

南道路で分譲地の角。間口が広く、陽当たりの良い南側に部屋を並べてとれる格好の土地だ。東南の角に玄関。キッチンと対面するリビングにはスギの大黒柱が立っている。その続きに和室。洗面・浴室はキッチンの奥かと思ったら、そこは食品庫で、水回りは1階の和室を広くとるため2階に設けたそうだ。階段を上がると、ホールの作り付けの本棚には文庫本や単行本がぎっしり。並ぶ背表紙からご主人は歴史ものがお好きなよう。10帖の洋室は5歳と3歳の男のお子さんの子供部屋。将来は二つに仕切られるよう1間幅の開口にしてある。その隣に主寝室。窓の外の格子の手摺りを回したバルコニー越しに八甲田連峰が垣間見える。家が完成して1年半。住宅コンテスト優秀賞受賞の「木の家」の快適な住み心地を伺った。

――県木住とのお付き合いは結構長かったそうですが。

和の雰囲気を醸し出す玄関口

いかにも頑丈そうなスギの大黒柱が堂々と立つリビング

スギの温かな色合いが目にやさしい玄関ホール

ご主人の話　幸畑にあった展示場を拝見したのが9年前です。アパート住まいで、ゆくゆくは家を建てることになるんだから、ちょっとずつ勉強してみようと思い、近くにまとまって建っている住宅展示場を見ることから始めました。

ハウスメーカーの展示場は外観も内観もデザインが洗練されていて、間取りも合理的で申し分ないものでしたけど、でもなぜかあまり惹かれず、逆に、県木住の展示場は、パッと見の好印象があったわけではないのですが、不思議と居心地の良さを感じました。床にも壁にも天井にも「木」を見せた造りは、それまで見学していたハウスメーカーや工務店にはないもので、それが素朴で柔らかな雰囲気を感じさせたのかもしれません。使っている「木」の主体はスギで、地元の山から伐り出したヒバやマツなどさまざまな種類の木材をそれぞれの特性に応じて利用している、と職員の方の説明で知りました。対応してくれた方が誠実そうだったことと、床のスギ板の感触が何とも心地よかったのを覚えています。

体に馴染んでくる「木」床のキズは子供の元気

奥様の話　アパートの近くに、ある工務店の木造展示場が完成して、見に行ったんですが、玄関を入ってすぐに違和感を感じました。〝自然の木を使った〟を謳い文句にしてい

深呼吸したくなるような、スギのいい匂いが漂う木の空間

たのに、出来立ての工業製品のようなニオイがしたんです。まだ完成したばかりだからで、生活しているうちに消えるのかな、とも思いましたけど、でも、それが自分の家なら、ちょっと嫌なことです。間取りやデザインも大事ですけど、こういう目に見えないところも暮らしの中では大事ですよね。そう考えたら、県木住の展示場に漂っていた良い匂いが思い浮かんだのです。深呼吸したくなるような、いい木の匂い。そこからますます県木住の家に惹かれるようになっていきましたね。

和室の飾り棚の板にはカツラの木を使っているんですよ。カツラの葉っぱは秋になると甘い良い香りがするんですが、この飾り棚を見て、その香

浴室を2階に設けることで1階にスペースを確保した和室

カツラの木で造られた和室の飾り棚

りを思い浮かべたりもしています。

ご主人の話　県木住さんから案内を頂くたびに完成見学会に行きました。〝勉強〟の時間も長くなって、20軒以上は見ましたね。見ているうちに、外観はこういう色合いのほうが好きだとか、四角な無落雪屋根よりは、への字の屋根で軒が出ていたほうが家らしいとか、だんだん好みが絞り込まれていきました。青森市新城の見学会で見た家が、2階に風呂場があって、その分、1階の部屋が広くなっていたので、わが家も浴室は2階にしましたし、県木住の家は黒い外壁が多かったけど八重田の家は木の色合いを生かした外壁で気に入ったので、わが家もそうしました。時間があった分、あちこち現場を拝見しながら〝気に入った部分〟を取り込めたので良かったです。

子供たちの遊び場でもあるウッドデッキ

奥様の話　いくら最新のキッチンでも、時間が経てば色あせますよね。でも「木」って、触れているうちに体に馴染んでくるし、色にも味わいが出てきて、その変化も楽しめます。県木住の木の家は、自然の変化も生かした〝かっこいい〟デザインだと思っています。

2人の子供たちがリビングの掃き出し窓から外のウッドデッキに出てぐるぐる走り回っているときとか、床のスギ板に寝転がっている姿を見ても「木」にして良かったと思いますね。地元で植林して、その木を使うことは環境にも優しいですよね。

ご主人の話　スギの床はキズが付きやすいけど、それは〝ホンモノ〟の無垢材だからこそで、何ということもありません。キズの分、子供たちが元気な証ですよ。

塀で囲むことで家は額に入れた絵のように引き立つ

近くの山の木で家をつくる 企業組合 県木住

企業組合 県木住

青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333 FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com E-mail : info@kenmokujyu.com

企業組合 県木住

大村 様邸

ユーザー訪問

DATA
青森市富田
2016年10月竣工
■延べ床面積／47.35坪（156.5㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（大黒柱、柱、床、棚、ウッドデッキ）、アカマツ（梁）。

下見板張りの黒く渋い外観。張っているのは塗装した青森県産のスギ板だ。快晴で風もなく、屋根の煙突から煙が真っ直ぐに立ち上っている。細長い敷地に合わせた奥行きある大村様邸。真横からカメラを向けたら、後ずさりしてようやく広角レンズに建物が収まった。黒っぽい外観とは対照的に、室内は、無垢のスギ板に囲まれた柔らかい明るさ。見上げる勾配天井に登り梁が並んで架けられている。階段を上がった2階にも、1階から勾配なりに登ってきた梁が力強い斜めの線を描いていた。その反対側、階段の向こうに、もうひと部屋ある。目の前に現れたのは、織り機だった。

玄関前の車庫スペースには薪ストーブに使う薪が積み上げられている

2年に亘る打ち合わせ〝時を織る〟家づくり

『大村家住宅新築にあたって』――ご主人がパソコンからプリントアウトしてくれた用紙のタイトルがそれ。〝こんな家にしたい〟という要望書である。これを県木住に提示（2014年）してから、月1回の打ち合わせが2年間にわたり続いた。『火を見ながら家族団らんがしたい。だから暖房は薪ストーブで。薪ストーブは土間に置きたい。……』、それと『リビングの一角に（妻の）織り機を置くスペースを確保したい』……。

2階まで通しの6寸角の大黒柱は、ご主人が県木住の施主参加型のチェンソー体験で伐り倒した樹齢50年のスギだ。薪ストーブのそばに据えられたテーブルもそのスギで製作したという。そこに向かい合い、なにはさておき2階の織り機のことから伺った。

――リビングの一角じゃなく、織り機専用の部屋が確保できたのですね。

奥様の話　そうなんですよ。「織り部屋」ですね。もともとわたし、着物の生地を織る仕事をしていたんです。最初の頃は絹糸（シルク）でしたけど、今は地元のヒツジの毛を使っています。マンクスロフタンという珍しいヒツジが十和田の北里大学にいるんですよ。日本に全

部で50頭しかいない希少種のヒツジで、そのうち19頭が北里大学獣医学部のキャンパスにいるんです。その毛を分けてもらって、ショールとか敷物などを織っています。アパートに織り機を置くスペースがなかったから、新築の家にはぜひとも織り機を置きたかったんですけど、「織り部屋」ができるとは。

ご主人の話　結婚した翌年の7年前から、機会をみては各社の展示場や完成見学会を妻と訪れていました。大手もあれば地元の工務店もあって、各社それぞれに特徴ある造りをしていました。どこに決めるかではなく、いずれの参考のためでしたから、漠然と見ていましたけど、その中で、ある1社の垢抜けたデザインやセンスの良さが印象に残りました。

家全体を暖めることができる薪ストーブが置かれたリビング。織り機で織った敷物がストーブの前に

奥様の話　その工務店で、主人の職場の同僚の方が自宅を建てたんです。見学させていただいたときから、家づくりに対するわたしの考え方が変わりました。同僚の方が見せてくださった「要望書」がきっかけです。こういう家にしたい、という要望を書いて工務店に渡したんだそうです。A4の

奥様が織り機で織物をするための「織り部屋」

用紙にびっしり、10枚くらいありましたね。こんなにも細かに要望できるんだ、ということがわたしにとっては新発見だったんですよ。家づくりって、ある程度枠組みが決まっていて、要望できる範囲はそんなに多くはないとばかり思っていましたからね。

木の家と薪ストーブを要望を満たす県木住で

ご主人の話　子供の保育園のことも、家づくりに大きな影響を与えました。息子に食物アレルギーがあって、自然の食べ物を重要視する「穀物菜食」の保育園に通わせることにしたんですが、われわれ親も、その保育園から〝自然〟の大事さを再認識させられましたよ。近くから採ってきたフキなんかを薪ストーブで沸かした鍋で煮るんです。ガスでも灯油でもなく燃料は薪です。薪を燃やして湯を沸かす――ということに、なにか暮らしの本質のようなものを見た気がしましたね。住宅にしても、デザインとかセンスとかは表面的なもので、自然の木を使うことが本質なのではないか。そこで初めて「木の家」と「薪ストーブ」が結び付いたんです。この二つを満たした家づくりをしているのは、県木住でした。

座卓（上）にも変えられるスギ製のテーブル

佐藤代表の話　それと、『思想する住宅』（林望著）という本の導きもあったんです。内容を要約すると、たとえばトタンとかはゆくゆく錆びて朽ちるだけですが、「木」は「時」を経るほどに味わいが増してくる。これが本物なんだと。大村様の目を「木」に向けてくれた一冊です。

――建物の奥行きが長くて、上棟式のときに面白い光景が見られとか。

佐藤代表の話　現場で柱を組み立てる大工が「いの5番」とか、〝次に上げてもらう柱〟の番号を呼ぶのが上棟式ならではの光景です。建物の図面に「いろはにほへと……」と順に番付を書き入れ、「い」の列の「5番目」の柱が「いの5番」と

畳と障子と木のコントラストが目に柔らかな和室

リビングとひと続きになっているキッチン

なります。一般的には「いろは
に……ちりぬるを」の「を」く
らいまでのところを、25ｍと
奥行きが長い大村様邸では、
「いろはにほへと　ちりぬるを
わかよたれそ　つねならむ
うゐのおくやま……」の「く」
まであって、使ったことがない
だけに大工たちは困惑ぎみで
したよ。

片流れの屋根の勾配なりに登ってきた梁が力強い斜めの線を描いている

ご主人の話　急かさない、の
が県木住の良さでしたね。要
望に対して一つ一つじっくりと
向き合ってくれました。売り
付けるのではなく、一緒に建て
る姿勢。念願叶って〝本物の木
の家〟に住むことができまし
た。

リビングの一角のソファにすわって真向かいに薪ストーブの炎が
眺められる

スギの木目が目に優しいゆったりとした洗面スペース

近くの山の木で家をつくる 企業組合
県木住
企業組合 県木住
青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333　FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com　E-mail : info@kenmokujyu.com

せんだい建設 株式会社

ユーザー訪問

N 様邸

DATA
平川市高畑
2015年11月竣工
■延べ床面積／50.00坪（165.62㎡）
■使用青森県産材／スギ（柱）、カラマツ（梁）など。

工務店を支える最も大事なものは〝信用〟といえる。営業エリアが限られた一つの地域内ではましてや信用なくして仕事は回らない。悪評はすぐに広まる。その実例としてN様の奥様はこう振り返る――「30年以上前におじいちゃん（義父）が大工に頼んで建てた以前の家は、初めから建て付けが悪くて、雨漏りもして……」と。結局、信頼できない大工の代わりに、義父は改修などの小工事を、せんだい建設㈱に依頼するようになる。「仙台芳美社長の奥さんとわたしは友だちだし、まだ小さかった慎吾さん（仙台慎吾専務）とうちの二女は同じ幼稚園でした」というつながりがあった。いよいよ浴室など水回りの傷みがひどくなって、奥様が仙台専務にリフォームの相談を持ちかけたのが2年前（2014年）。「建て替えるつもりはなかったんですけどね、専務に案内されて新築の現場を見学しているうちにその気になってきて」と笑う奥様。建て替えへ背中を押してくれたのは、小工事の堅実な仕事ぶりで積み重ねてきたせんだい建設の信用である。

間もなく5人家族になるN様邸にふさわしい広々とした玄関

当初計画はリフォーム 家族が結束し建替えへ

奥様と娘夫婦とお子さんの4人家族。間もなく2人目のお孫さんが生まれるのを祝福するかのように、12月にしては空の青がしたたりそうな快晴の日、N様邸の外観を撮影しに向かった。その2日前、取材したときは大雨で、内観しか撮れなかった。家の正面に立ってカメラを向けたら、目の端に、水が見えた。ブロック塀の下部の排水パイプから水が流れ出ている。湯気が上がっていた。温泉なのだった。N様邸の浴室は、湯口をひねると温泉が出るのだ。自宅で温泉に浸れるのだから快適この上ないが、反面、成分が強いだけに漏れ出した湯が柱を腐食させるなどの難点もあるようだ。取材ではそのことから伺った。

――近くの大鰐温泉から湯を引いているのですか。

奥様の話　いえいえ、この近く

ハンモッグがつり下げられているリビング

を掘ったんですよ。もともと、うちのおじいちゃんたち3〜4人で、営業に使うのでなければいいという許可を得て、掘ったんだそうです。温泉を汲み上げるポンプの電気代とかを共同で出し合う組合になっていて、今は20軒ぐらいが利用しているようですよ。うちの娘2人は生まれてからずうっと温泉を使ってきたものだから、建て替えると決めたときも、「温泉

温泉成分のせいで痛みが激しかった風呂も新品に

排水パイプから流れ出ているのは温泉

だけはなくさないでね」って念を押されました。ただ、普通のお湯と違って成分が強いから、あちこち家を傷めるんですよ。

仙台専務の話　風呂場を点検してみたら、タイル貼りの浴槽の目地から湯が漏っていて、柱の根元などが腐っていました。それを直すとなれば土台からだからけっこう大掛かりな工事になります。しかもリフォームの場合、手をかけた部分は新しくなりますけど、古いままの部分がよけいに古く見えてきて、そこもまた直したいとなってくるので、この際いっそ建て替えたほうが結果的には快適な暮らしができるのでは、と提案させていただいたんです。

湯口をひねれば温泉が床暖の居間には揺り籠

――築30年といえばまだ住めるし、建て替えに踏み切るまで勇気が要ったのでは。

奥様の話　リフォームで済めばそれに越したことはありませんでした。建て替えとなれば金額の桁が違いますからね。年齢も考えれば億劫ですよ。でも、一部リフォームしても、またリフォームしなくちゃならなくなるんですよ。おじいちゃんのときがそうでしたからね。あっち直して、こっち直して。初めから建て付けの悪い家なのに、当時はこのすぐ前の道路をダンプカーが頻繁に通っていましたから振動で家にも透き間があいてきたりしてね。

建て替えを決めたのは、専務の薦めもありましたけど、やっぱり家族の意見でした。皆で力を合わせて借り入れしようってね。リフォームして一部が新しくなるんじゃなく、全部が新品になるのですから、これから30年40年……、孫の代になっても住めるはずです。そうと決まれば、なんだか大きな仕事を済ませたみたいに肩の荷がおりましたよ。

――黒いサィディングの外壁と、玄関ポーチから真上のサ

専務がお孫さんたちのために吊ってくれたというハンモック。たまに奥様も利用している

ンルームまでを白くしたツートンの外観は奥様たちのご要望ですか。

奥様の話　いえ、専務です。わたしらが要望したのは、まず温泉。娘は温泉で育ちましたからそればかりは外せないって。それとこれも娘ですが、リビングの窓を大きくして縁側みたいに腰かけたいと。あとは家族の人数分の部屋数。それだけ要望して、外観にしても室内の壁や建具の色なんかにしても一切お任せしました。

階段を上がったすぐ脇にある子供部屋

——リビングに吊ってあるハンモッグはお孫さんのものですか。

奥様の話　専務が吊ってくれたんですよ。二女の孫も使うし、嫁に行った長女の孫たちも遊びにくれば使うし、わたしもちょっと横になったりね。床暖で室内は暖かいし、楽ちんだし、揺り籠ですよ。

天井までのドアが空間を高く見せる

せんだい建設株式会社

平川市高畑前田155-2
TEL.0172-44-8545 FAX.0172-44-8547
http://www.sendaikensetu.com
E-mail : info@sendaikensetu.com